



創刊号
2002.2

Mint Club

財務省造幣局

ミントクラブを創刊しました



造幣局長 筑紫 勝磨

皆様方におかれましては、造幣局の貨幣セットを常日頃よりご愛顧いただき厚くお礼申し上げます。

今回発刊いたします「ミントクラブ」は、貨幣セットを長年にわたり多数ご購入いただいている熱心な収集家の皆様方に、貨幣に関連する各種情報をお知らせする目的で作成させていただきました。

今後年二回程度「ミントクラブ」を発行し、桜の通り抜け等のトピックス、造幣博物館所蔵品の紹介、造幣技術の解説、今後の貨幣セットの販売予定等について掲載していきたいと考えています。

「ミントクラブ」の内容につきましては、皆様からご意見ご感想などを頂戴し、より一層の充実に努めたいと存じますので、ご愛読いただきますようよろしくお願いいたします。

「通り抜け」と「花のまわりみち」

1. 桜の通り抜けの沿革

造幣局本局の所在地であるこの辺りは、昔から景勝の地として名高く、春は桜、夏は涼み舟、秋は月など四季折々のにぎわいを見せ、特に春の桜は有名で、対岸を桜ノ宮と呼ぶにふさわしく、桜が咲き乱れていたといわれています。

造幣局の桜は、明治の初めに藤堂藩の蔵屋敷（泉布観の北側）から移植され、品種が多いばかりでなく、他では見られない珍しい里桜が集められていました。

明治16年、時の造幣局長の「局員だけの観桜ではもったいない。大阪市民の皆さん方と共に楽しもうではないか。」との発案により、満開時の数日間、構内川岸の桜並木の一般開放が始まりましたが、花見客の混雑緩和のため一方通行としたことから、いつしか「通り抜け」という名前が定着しました。

桜の通り抜けは、現在では大阪の年中行事の一つとして行楽スケジュールに必ず加えられるほどの多くの人を誘い、その人出は70万人から100万人に及んでいます。

現在、造幣局本局には約120品種・約400本の桜があり、関山・松月・普賢象などの八重桜が主です。なかでも、大手毬・小手毬などは造幣局以外ではめったに見られない珍種といわれています。

2. 花のまわりみちの沿革

造幣局広島支局では、昭和42年頃から本局（大阪市）の通り抜けの桜を構内に移植し育ててきましたが、平成3年、造幣局創業120年を記念し、この桜を市民の皆さんに楽しんでいただくため、「花のまわりみち—八重桜 イン 広島—」として、期間中構内を一般開放しました。

現在、造幣局広島支局には約60品種・約240本の桜があり、本局と同様に関山・松月・普賢象などの八重桜が主となっています。

3. 桜の通り抜け及び花のまわりみちの期間

桜の通り抜け及び花のまわりみちの期間は、桜の開花状況等により毎年異なりますが、概ね4月中旬から下旬の7日間（桜の通り抜け）と5日間（花のまわりみち）となっています。平成14年の開催期間につきましては、桜の開花予測を基に検討を行い、3月中・下旬頃に造幣局から新聞発表させていただく予定です。

第22回 世界造幣局長会議を日本で開催

第22回世界造幣局長会議 (MINT DIRECTORS CONFERENCE) が、平成14年4月15日 (月) から17日 (水) までの3日間、日本で開催されます。

1. 世界造幣局長会議とは

世界造幣局長会議 (MDC) は、1962年に欧州の各国造幣局長が初会合を開いて以来40年の歴史を有する会議であり、現在、加盟国数は40か国を数えるに至っています。

会議は隔年に開催されてきており、今では、加盟各国の造幣局、オブザーバー造幣局、各国の貨幣製造設備メーカー、自動販売機メーカー等合わせて300人程度の出席する大きな国際会議に発展し、新しい貨幣素材、新しい技術による新タイプの貨幣、偽造防止技術の開発等に関する全世界的な規模の協議の場となっています。

また、加盟各国が、同会議に自国の貨幣規格を登録し、相互にデータを共有することにより、類似貨幣による国際間の不正使用防止を図っているなど、今や、貨幣製造を担う者にとって、大変貴重なそして意義ある会議となっています。

2. 日本での初開催と会議内容

2000年10月にオーストラリアのキャンベラで開催された第21回会議において、次期会議の開催国に立候補しましたところ、加盟各国の圧倒的な支持を得て、2002年に日本で初めて開催すること (アジアでも初めて) が決定されました。

会議では流通貨幣や収集貨幣の技術やマーケティング等、様々な分野における最新の状況分析、調査報告等が行われ議論されます。各議題は30分から120分程度の予定でコーディネーター (座長) 1名及び4~5名のプレゼンター (発表者) により進められます。

3. MDCロゴ



図1 MDC共通ロゴ



図2 MDC開催国ロゴ

MDCでは、MDCとしての共通ロゴ (図1) のほか、開催国ロゴを定めることができることとされており、図2のロゴを作成しました。このロゴは日の丸と貨幣を表す円と日本を代表する花である桜で構成されています。

ちなみに、共通ロゴは3

台の貨幣を製造する圧印機をあらわしています。文字は、左上から時計回りにフランス語 (Conférence des Directeurs des Monnaies)、英語 (Mint Directors Conference)、ドイツ語 (Münzdirektorenkonferenz) で「造幣局長会議」を意味するものです。

4. MDC加盟国

MDCの加盟国は以下の40か国です。

| | | | | | |
|--------|---------|--------|--------|-------|--------|
| アルジェリア | オーストラリア | オーストリア | ベルギー | ブラジル | カナダ |
| 中国 | コロンビア | クロアチア | チェコ | デンマーク | フィンランド |
| フランス | ドイツ | ギリシャ | ハンガリー | インド | アイルランド |
| イタリア | 日本 | 韓国 | リトアニア | マレーシア | メキシコ |
| オランダ | ノルウェー | ポーランド | ポルトガル | ロシア | シンガポール |
| スロバキア | 南アフリカ | スペイン | スウェーデン | スイス | タイ |
| トルコ | ウクライナ | イギリス | アメリカ | | |

平成14年前半の貨幣セット販売予定

| 販売区分 | 種類 | 販売予定数量 | 販売予定価格 | 販売予定時期 |
|---------------------------------|-----------------|------------------|--------------|--------|
| 通信販売貨幣セット | 敬老貨幣セット | (セット) 200,000 | (円) 2,200 | 5月 |
| | 通常ブルー貨幣セット | 150,000 | 7,350 | 5月 |
| 2002FIFA ワールドカップ™ 記念貨幣セット | 金貨単独セット | 50,000 | 40,000 | — |
| | 銀貨単独セット | 50,000 | 6,000 | — |
| | 金貨・銀貨2点セット | 50,000 | 45,000 | — |
| | 500円3点セット | 200,000 | 3,000 | — |
| 通年販売貨幣セット | 記念日貨幣セット | 7,000 | 2,100 | 2月から |
| | ペーパーウェイト | 4,000 | 4,000 | 2月から |
| | ジャパン(フル)貨幣セット | 6,000 | 2,000 | 2月から |
| | ジャパン(シンプル)貨幣セット | 6,000 | 1,000 | 2月から |
| | 見学記念貨幣セット | 6,000 | 900 | 1月から |

(注) ワールドカップ記念貨幣セットの販売時期等につきましては、今後造幣局から発表させていただきます。

現行貨幣年銘別製造枚数

(単位:千枚)

| | 1円 | 5円 | 10円 | 50円 | 100円 | 500円 |
|-------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 平成9年 | 783,086 | 239,086 | 491,086 | 150,086 | 272,086 | 173,090 |
| 平成10年 | 452,612 | 172,612 | 410,612 | 100,612 | 252,612 | 214,608 |
| 平成11年 | 67,120 | 60,120 | 359,120 | 59,120 | 179,120 | 165,120 |
| 平成12年 | 12,026 | 9,030 | 315,026 | 7,026 | 172,026 | 595,969 |
| 平成13年 | 8,024 | 78,025 | 542,024 | 8,024 | 8,024 | 608,051 |

(注) 500円貨幣は平成11年銘までは白銅貨幣、12年銘はニッケル黄銅貨幣です。現行貨幣の製造開始年からの年銘別製造枚数につきましては、造幣局ホームページ <http://www.mint.go.jp/> でご案内しています。



平成14年5月31日から6月30日まで、日本と韓国で開催されるワールドカップサッカー大会(2002FIFAワールドカップ™)を記念して、次のように記念貨幣を発行いたします。(引換・販売予定は平成14年春頃)

千円銀貨幣(純銀)

10万枚

・量目=31.1g ・直径40mm ・斜めギザ等
・表=トロフィーと桜とムクゲ ・裏=エンブレムと選手

1万円金貨幣(純金)

10万枚

・量目=15.6g ・直径26mm ・斜めギザ、潜像等
・表=選手とストライプ ・裏=エンブレムと桜と虹とボール



500円ニッケル黄銅貨幣

(銅72%、亜鉛20%、ニッケル8%)

3種各1千万枚

・量目=7g ・直径26.5mm ・斜めギザ、潜像等
・表=地図と選手3種 ・裏=エンブレムと試合時間(45分ハーフ)



ワールドカップサッカー記念貨幣

偽造防止対策は万全

現在製造を行っているワールドカップサッカー大会記念貨幣には、新500円貨幣で導入した種々の偽造防止技術を導入しています。今回は、記念金貨幣の偽造防止技術について紹介いたします。



1. 潜像

貨幣裏面のサッカーボール部分に潜像加工を施しています。貨幣を上下に回転させると、見る角度によってサッカーボール内の光る部分と光らない部分が反

転して見えるようになっていきます。これは、光の入射角、反射角による反射光の明暗の差によって起こる現象を応用したものです。

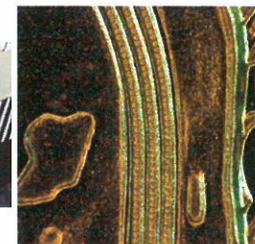
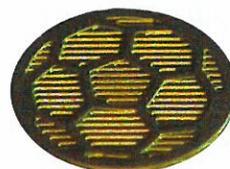
なお、記念ニッケル黄銅貨幣の潜像は左右に回転させると見えるようになっていきます。

2. 斜めギザ

貨幣側面のギザを斜めにするすることで偽造抵抗力を向上させています。貨幣の圧印と同時に貨幣側面に斜めギザ加工を施す技術は、日本の造幣局が独自に開発した技術であり、日本をはじめアメリカ・イギリスでも特許を取得しています。

3. 微細点加工

転写等による偽造を防ぐため、貨幣表面中央部にあるサッカー選手のユニフォームのサイドライン等に微細な穴加工を行っています。これは、微細加工における最先端技術を使用したものであり、偽造を防ぐ効果は非常に高いものになっています。



1. はじめに

近年、諸外国において着色された貨幣の発行が非常に多く見られるようになって来ました。造幣局でも貨幣や金属工芸品等への各種着色方法について、その製造方法や量産化への問題点を調査・研究していますが、今回はこの中から、製品化、特許取得と一応の成果が得られた真空蒸着法を利用した着色方法について紹介します。

2. 真空蒸着について

真空蒸着は、金属あるいは非金属を高真空中で加熱蒸発させ、製品表面に薄膜として付着させる手法で、通常の電気メッキ法に比べて簡単なマスキング作業（蒸着させたくない部分を塗料などで予め覆っておくこと）で部分的に蒸着することができるというメリットがあります。

3. 金閣寺の銀メダルで製品化

造幣局では、このメリットをうまく生かし、図1に示すような金閣寺部分だけに金蒸着した純銀製の金閣寺メダルを製造しています。また、硫化処理（硫化いぶし仕上げ）を行った銀メダルに金蒸着を施しているため、蒸着した金の付着強度が大きい上、重厚な風合いの黄金色が得られるという思わぬ効果も得られました。



図1 金閣寺メダル



図2 フローラメダル

紫色…78.5%Au-21.5%Al

黄色…75.0%Au-25.0%Ag

赤色…75.0%Au-5.0%Ag-20.0%Cu

さらに、マスキングと蒸着の操作を2回以上繰り返すことによって、図2のように複数の色に塗り分けることも可能です。これは、組成の異なる3種類の合金によって、紫色、黄色、赤色の3色に蒸着したものです。

4. まとめ

真空蒸着は、マスキング作業が簡単であるため、このメリットをうまく生かすことによって、金属工芸品への着色が簡便に行うことができます。

なかでも硫化処理と真空蒸着とを組合せたものは、付着強度が大きくなる上に落ち着いて重厚な仕上がりとなることから特許を取得しました。



A | B



A. ルイ十六世肖像牌、表。1781年、フランス造幣局製。青銅。直径73mm。重量213g。ブロンズ燻し仕上。三段覆輪の中にブルボン家のフランス國王ルイ十六世(1754~1793)(國王在位1774~1793)の右向上半身の肖像。ラテン語で「LUDOVICUS XVI FRANC ET NAVARR REX (フランス及びナヴァール國王ルイ十六世)」のロオマン體凸文字。肖像の下に小さくDU VIVIER F (デュヴィヴィエ作、Fはラテン語Fecitの略)の凸文字署名。原型彫刻はパリ造幣局の主任彫刻家であったPierre Simon Benjamin Duvivier (1730~1819)。

ルイ十六世はルイ十五世の孫。1770年にハプスブルク家の女帝マリア・テレジアの娘マリー・アントワネットと結婚した。善良な人柄だったが、王妃マリー・アントワネットの意見に左右される様な意気地の無さと、チュルゴオ、ネッケル、カロヌの様な有能な人材を起用しながら彼等を十分に活用出来なかった薄志弱行のため、遂にフランス革命を抑へ切れなかった。1792年九月に王制は廢され、1793年一月二十一日、パリに於て斷頭臺に送られた。

此の章牌の下のコバにはフランス造幣局のミント・マクであるコルヌコウピア(cornucopia ホウセウツノ 豊饒の角)とBRONZEの文字が打込まれてある。

B. 全左、裏。三段覆輪の中にマリー・アントワネットの左向き上半身肖像。ラテン語で「MAR ANTON AUSTR FRANCIE ET NAVARR REGINA (オオストリアのマリー・アントワネット、フランスとナヴァールの王妃)」の凸文字。下部に小さくDU VIVIER 1781の凸文字署名。Josèphe Jeanne Marie Antoinette (1755~1793)はマリア・テレジアの第九子としてウィーンに生れ、オオストリアとフランスの同盟強化の爲に後のルイ十六世と結婚した。夫に對して政治的影響力を持ったり、母國オオストリアの國益を優先したり、贅を盡した生活をしたりでフランス國民の反感を買った。革命の最中、國王と共にパリを脱出してオオストリアに頼らうとしたが失敗して捕へられタムブルの獄に幽閉された。外國勢力と共謀して反革命を企てたといふ罪に問はれ、1793年十月十六日斷頭臺で處刑されたが、氣位高く毅然とした態度であったといふ。

此の章牌の彫刻は實寸での極印直彫によるものである。表を強く大まかに、裏は思切つて繊細華麗にと作り分けて見事である。

(元工藝管理官 松岡隆範記)

泉布観と夏雄ものがたり



長谷川 栄

(東京国立博物館名誉館員・品川区O
美術館館長・2000年フランス政府
騎士芸術文化勲章叙勲)

大阪造幣局は明治の創業当時においても、奏任官10人、判任官18人、附属等外共27人、職工157人、雇外国人8人(のちに31人となる)、合計220人を擁した近代施設で西洋の科学文明の粋を集めた一大拠点となっていた。当時の造幣寮構内にあり現在もひっそりと茂みのなかに息づいている「泉布観」の建物は、こうした造幣改革に従事する人びとの高級な社交場としてクラブ会(夏雄日記)などが開かれ、欧化の最も先端的で政治・経済・文化すべての横断的な交流の発火点となっていた。

あの後にスターとなっていた、「鹿鳴館」は明治17年(1884)ごろ東京において社交場として欧化の役割を果たしていたが、それを遡る10年以上も早く大阪において明治文化開化の役割を果たしており、夏雄ら造幣の彫金家たちもこの文明開化の坩堝のなかに身をおいて肌で西欧の文明を吸収していたことが考えられる。

東京の鹿鳴館は日比谷公園の帝国ホテルの場所にあつて、連日連夜、虚々実々の百花繚乱の宴が開かれて著名となり、小説化されたりドラマの主人公となって歴史上のスターとなったが、大阪の泉布観は不幸にして、西洋文明受容の重大施設でありホットで実質的な社交場であつたにもかかわらず、未だ歴史上に浮上してきたことはなかった。

この泉布観を今一度見直して、大阪における鹿鳴館以上の欧化の重要施設としてスポットを当てたいと希うのが本稿の目的である。

彫金家加納夏雄と大勢の弟子たちが、時の大蔵大臣らから急遽指名を受けて、国際的に通用する円形貨幣のデザインと刻印製造と量産の火急の使命を全うした。

幕末まで流通していた小判や異形貨幣が維新に伴う貿易決済などに支障をきたし、そのために西洋式円形貨幣の量産方式を導入して大改革を決定することにした。

香港のオリエンタルバンクの造幣施設を譲り受け、大阪に移して雇外国人の指揮下で、維新後まず最初に手掛けたのが官営マニファクチュア方式の大阪造幣局での貨幣生産であつた。

現在の造幣博物館に遺つて展示中の、「大阪造幣局全景」(マンチニ筆水彩画、明治4年)によるとその全貌が堂々と精密に写生されており、壮観は鎖国下にあつた日本が初めて大胆に移入した貨幣鑄造の工場と関連施設の規模の大きさを如実に示している。

泉布観はそのなかでもきわだってモダンな回廊式のコロニアルスタイルをとって建設

され、ウォートルスの建築監督による潇洒な亜熱帯向きのイメージをもっている。

加納夏雄の夥しい日誌が東京国立博物館に所蔵され、記録には度々にわたり「クラブ会」「キリスト日祭礼」実施の条があり、この建物が日本側と雇外国人との接触の重要なパーティ会場であつたことが推察される。

加納夏雄が造幣に従事したのは、(1)貨幣の意匠(明・2・7~8月)(2)貨幣の試験打(明・2~4年)(3)貨幣の刻印(明・4~10)の三期に分けられ、名人として得意としていた緻密な刀剣装飾金具の彫金技術が生かされ、雇外国人たちはその妙技に驚いたという。

夏雄は造幣に動員される前に、明治天皇佩用の御剣製作という重要任務遂行中であつたが、時の政府はとにもかくにも貨幣製造が最重要事であるとして、東京御徒町に住む夏雄の大阪行きを至上命令として動員した。夏雄細工所の若い弟子達約20名も同行しての大きかりなギルド態勢だったので、量産の効果は著しく上がり、やがて全国津々浦々まで通貨として普及したのはいうまでもない。

三期にわたり東京と大阪の間を往復していた夏雄細工所の彫金家たちは、政府からの緊急な動員にこたえる移動の苦勞も相当にあつたようで、「造幣下坂日記」には涙ぐまし、大八車を引いての歩行による大量移動の記録もある。

雷雨をものともせず、老母を大八車に乗せて決行する、このようなシーンを想像するだけでも、明治維新の改革がいかにか急がれ、国際的通貨の実施にあらゆる努力がなされていたかりアルに判ってくる。

このへんの記録については、かつて「大八車の交通史」研究家のかたから問合せがあつたり、また「泉布観と夏雄」のものがたりを火急な維新史の鮮烈なドラマと位置づけて、東京の新橋演舞場あたりで上演する芝居を脚本したら…という提案も来ていた。

たしかに大阪造幣局は明治維新のもつともホットな歴史の証人であり、実に現存している泉布観を生き生きと復活させるような、近代文化発祥の拠点としての再認識の運動が起きてよさそうに思われる。

歴史への新しい視点が、日本を激しくつくり変え、近代を成功に導いた陰に実在している造幣のものがたりを、もう一度注目し、クローズアップしてくれるよう切に希望している。

(参考文献=造幣局「時報」1977・10月以降連載、東京国立博物館「MUSEUM」180号、185号、316号、232号、至文堂「夏雄と勝珉」111号、東京国立博物館「紀要」14号等いずれも筆者による研究論文)

発行所 財務省造幣局

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目1番79号

電話 06(6351)5105

造幣局ホームページ <http://www.mint.go.jp/>

編集者兼発行人 山村 武史

平成14年2月5日発行

このミントクラブはエコマーク商品に
認定された再生紙を使用しています

